

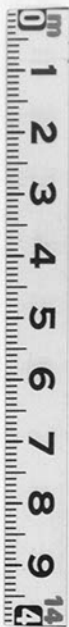
詩南車

昭和八年四月一日納本
昭和八年四月五日發行

終刊號

第三十輯 ● ●

詩南社
馨 城



詩南車

第三十輯

詩南車 第三十輯 目次

紫の句帖より (俳句) …… 渡邊何鳴

短歌

高井久 赤井 佐々木 松崎村 美川 佐川 吉田 高木 白木 山野邊

戸石山 根井池 霜田澤 湯田澤 大窪 川部 下川部 岸上 山 美彩 照君 秋志 朗平 明子 枝子 子司子 子月子 子歌

山雀集 (短歌)

詩

吉田 片寄 市

小藤 山澤 西山 林 岸 深 田 美 美 志 恵 朗 子 子 枝 子 子 郎

聲明書 …… 解体に當つて …… 片寄歌二

詩南車 第三十輯 目次 記後編 ● 報 雜 ● 窓 車 ● 且月流女 ● 譜年此有詩

紫の句帖より

渡邊何鳴

春曉の星ちりばめし木立かな
 春曉やひときわたれる耶蘇の鐘
 春曉やうつゝに聞きし鳩時計
 石輪玉麥生の上にたゞよへる
 かたはらに土の鉄や菊根分
 きさらぎや葉深く蘭の花もてる

地震

高久 晩霞

怖ろしきなる震るものかぬばたまのこれの世今し潰ゆと覺えし
夜を寒み臥やり堪えたる大なるの揺れ常ならず室を轉び出づ
なる震るを屋上に居る物凄さ闇の世呻き青き火走る
地震過ぎて語り合ふこそおかしけれ慌てししぐさ偽はらで言ふ
大揺れの地に浪起り火出でしと聞くむらぎもの心いためる
夜くだちて打つ警鐘の間を遠み近き火と知らで枕擡げず (小火四首)
玄關氏が近火見舞を迎へ居る眞夜は主人の夢圓かなりし
小火にして終はりしといへ庭先に燃ゆると云ふとうたて臥やりし
人々の問ひなぐさむる近き火を臥やり聞きしと應へらく恥づ
夜を罩めて降り積りたる今朝の雪珍らしみ見つゝ人々出めく (雪二首)
白絹を被げる如き群山は青空高く朝陽に映ゆる

戯作

赤井 嶽男

村會議員になる事ばかり話して今日も羽織を着て出掛けたり
貰錢貰つて今日も遊んでる學校を出たが困つた男

小國の代表なれどベネツシエはよくしやべるので名を覺えたり
役立たぬ原稿頼に溜りたり函を眺めてわれは寂しも
戸をくれば冷き風のさと入りて飯野田圃の雪斑らなり

ばら

佐々木 顯

静物のいばらの書面浮び見ゆ風の吹きなば揺れんとも思ふ (坂本高正氏展にて)
鉾杉の梢のみ雪さらさらと熊笹に落つる音のしづけさ

くさくさ

松村 清

獨りのみて酔ふ酒ならず雨だるるほどはふりつる雪夜となれり
母病みて夕餉わびしも爛つけてひとりしのめる酒うまからず
足もとにはほこりをまきてたつむじ小さきながら見つつわびしも
つのもりくる憤ろしさこらへつゝくり返しくり返し讀ましめにけり (燈の復習)
いちどきにおりたち歩む鳩の足のいたいたしかも霜をふみつる
鳩むれの一羽は鈴をつけて居りひきづりながら音をたつるも

冬

日

美 崎 一 郎

冬日射す緑のぬくきに水やれば喜ぶ目白ききと聲立つ
 幾度か器の縁に止りては水を浴びんとためらふ目白
 嘴を器の水に打ち振りてききと喜ぶ目白のあはれ
 深々と浸る目白の羽ばたけば水は飛び散る縁の日向に
 水浴びて黒ずみし身を乾かすと小羽ふるはしふるゝ目白
 水浴びて心和むか細々とさへづり出でし籠の目白は
 暖かき冬の陽射しに細々とさへづる目白聲のさみしき
 ははそはとそだ火焚きつゝ爐に寄りぬ寒きこの夜は火はよく燃ゆる
 冬の夜は爐の熱灰に埋めて焼くにんにくの香も親しまれつゝ
 やゝ焦げし上皮むけばにんにくの緑の芽生え何かたのもし
 首伸ばし姿あらはに羽ばたけど飛びは立たざり黒き海鳥
 黒き鳥潜りしあとの青波に消ゆるうたかた見つゝかなしき
 黒々と海邊に群るゝ冬鴉寄れる魚などつひばむらむか
 冬日和續く日頃や我が庭の薔薇の蕾はふくらみにけり
 紅の淡き蕾はふくらめど遂に咲かざり庭の冬薔薇
 色褪せし友彈のごと縮みゆく薔薇の蕾に冬日さびしき

父 老

ゆ

佐 川 和 弘

越路の山は雪ならむけさの寒さに思ひつゝひとりあつき飯食む
 房總の國遠く来てみちのくにふたむかし餘の年月は經む
 いくたびかいのちひろいし船乗の昔思ひば父の衰ふ
 四十年のながき船乗を業となしよはひ寂しく父老いむとす
 四十年のながき船乗を業となしよはひ寂しく父老いむとす
 破り戸あけ寝ぬるはおしと冬月の冴えたる庭に友は下り立つ

耳 鳴

り

吉 田 甫

ごうごう耳鳴りがして死の豫感がある夜更けあゝ私はどうしても生きたい
 氷枕のツラゝを採りに行つた妹の純情に泣かされてゐる
 ふう／＼手をふきながら戻つて来た妹の頬に純情が眞赤に燃えてゐた
 寝ずかれぬまゝにふつ／＼戀情が湧く夜更け唯わけもなく泣けて来る
 夜更けてどつかで犬の遠吠がする山の一軒家は餘り寒む過ぎる
 痛みが来ると頭の中は生と死がするどい闘争の焔となつて燃え上る

炭焼山點景

高木直吉

一月初旬、歸省中を湯岳の麓に父の炭たきを手傳ふ

曉の未だ小暗き山原にさら／＼と雪は降りて來にけり
早くより陽の照る山の背の道は凍みどけし爪立て、ゆく
陽の外れし山のなだれはうらさびし雪を交へて木枯の吹く
ゴム足袋をはける足裏はむづがゆし杉森の道を炭負ひて通る
夕方の凍みいちむるき森の道を負ひ行く炭は未だぬくめる
隠居して六年この方業とせる父のたく炭は人みなな響む
炭の値の折り合はずして賣れざりし父の心は寂しくあるべし

軍事郵便

白木英尾

ろろろろん海岸理立地に躍動する新興市街の意力を見る！
巨大な機重機の鐵柱だ近代科學のこゝろよい感覺がある
働いてゐる人間の顔をのせてあとからあとからトロッコが走る
波の上で浚渫船の巨體が揺れてゐる港はさぶしい午後四時のかげり
すばらしいプロレタリアの感情の洪水だおれの五體は濡れてゐる
山の上でかちんかちん石割る音が雪もよひの空に響きわたる

山からくる淡い哀感！おれは石工の背中から話しかけた
赤いスタンプの軍事郵便がけさの卓上にはつきり置いてある
マンシウから來た赤いスタンプの手紙にほのかなる昂奮を覺える
こみあげてくる民族的の感激があんなに日の丸を振つてゐるのだ

雪・津浪

山野邊青甫

往還の傾斜にスキーをすべらすと兒らさぐめける雪晴の朝
割竹のスキーすべらし次々に來る兒をさけて坂路をのぼれる
夜深く物書きをれば吾妹子の雪降りつぐと言ひよれりけり
しんしんと冷えまさりくる夜の更けを書くことやめて爐に手をかざす
雪の夜を寒々をるに縁下に三毛猫の來てするどき聲す
はかどらぬ爲事思ひてたかぶれる心となりてすべなくぞをる
日を期して書くものはあれこの宵を早寝しつれどねにつきがたし
深く思へばこのごろわれの疲れたり明け方を知らず明け方を眠る

(二日夜の地震は三陸地方に津浪火災を起したり)

大きな地震揺れ過ぎし時三陸に恐ろしき波は立ちてゐたるなり

朝霜 戸部曙歌

朝なさな霜立ちしることごとく落葉しにけり灰色の山
起きぬけの冷をしるきかも庭園のダリヤは黒く霜やけにけり
おとないしこの家の門に咲きほけし黄菊白菊香りしたしも
しそやかに落葉を濡す朝雨の冷めたかりけり指にしみ入る
しみじみと傘に音たてて降る雨のうら寂しかり山路ゆきつ
大霜の今朝の冷めたさ裏山に銃筒音さえてひびかいにけり
落葉してあらはになれる白樺の寒むぎむしかも冬ざりにけり
時雨空いよ／＼暗し真向ひの白樺の木は目にしるさかも
ぬくぬくと陽の照らうなり落葉掃く人聲こだます林の中に
荒れたるがままになりおる庭園に咲きほけにけり冬ばら一つ

折り折りの歌 石川梅子

朝風のそよぎ明るく篠竹をわたる小鳥の聲とほるなり
春されど朝間はいまだ寒々し遠山かけて風とよむなり
庭草の枯れしを採れば土なかに動きさそけき虫こもりぬ
吾が植えし春球根の新芽立ち今朝ははつかに赤らみにけり

雪の日の雀二三羽軒下にさむ／＼と餌をあさりぬるあはれ
雪の日の寒くわれば小鳥らの毛並やわ肌凍るにやあらんか

新春雑詠 山下多賀子

賣初の市暮れればさむ／＼と大戸引きぬる丁稚が二人
二日市暮れし帳場に灯あかあかと賣上をよむ主人と内儀
獅子頭踊りて口を開けしかば男圓ら瞻視かれにけり
あを／＼と照りかへす日の草道を空荷となれる馬ひき戻る
から／＼と下駄の音高く月の夜の班雪明れる門訪ひにけり
松の葉にさゝりし雪の凍て光る庭べとなりぬ月の明きに

子供 根本橘月

守が背にカラ／＼と笑ふ子の頬にキッスをしてあやしめる
幾人かの子の父となりぬ過ぎ去りし月日かぞへて淋しき心
吹雪して學校にゆけず居る吾子に尋常二年の本教へけり
晝寝せし吾子は今宵はいねずして母の話をかしこまり聞く
漸くに歩む子供をあゆませてゆくあぜ道に淡雪のふる

女流月日 一寸法師

「女の話なんてくだらんこつた。わしや二免蒙るよ」
「なるほど、だめですか」
「だめだよ。第一、お前んとこの雑誌に、わしの語りうる女傑は居らんたる、どうやら黒江寛だけが詩人らしい詩人だよ」
「歌人らしい歌人では……」
「そんなの、居らんよ」
「萩原たけさんなどは……」
「まあ熱心なやつとるようだからこの頃は短歌會にも出てくるちうこつたから関秀歌人としては、先づあれだけになればよいだろ。惜しい哉未だ歌の格がきまつておらんが、作品は良く推敲されとる」
「然し、謡謡夫人となつてから格もよくなつたやうですが」
「短歌會だけぢや判らん。多作して伸び／＼と廣がつて、それからでな

くつちや歌格は固まらんよ」
「石川梅子さんはどうです」
「いつか白木が書いておつたが夕暮れて川面にのこる水明りの道吾れはひとりなりけりわしもこの歌は覚えておる。この人には、何かこつて困めくものがある。創作が常春でこんな名を見たやうな気がするが……」
「僕もよく知りませんが作歌の経験は長い人だと思ひます。平へは先だつて來られたさうです」
「それは違ひなかつた。熊谷企見子にも逢つたことないが、一時讀賣歌壇などで見ておつた。歌壇は平凡だが女流としては充分だよ。然し、もつとパツ／＼と作らんけりや今後いかんよ」
「萩原さんどうです」
「能舞の小鼓、手すさびの琴、どちらなどうとも言ひかされるれ」
「うまい！すると、笛や太鼓は誰になりませうか」
「そうせかすともいい。とにかく」

ぬり立ての壁に棒にて繪を書きしと自慢に告げ来る子を叱かられず

旅 情 井 尻 窈 子

たゞわけもなく飛び廻つてみたい衝動！太陽の香りが散布して朝
晴れ上つた夏井川の面に私の朝の感情がつつ切つてひた走る
世の中の鋭い爪でずた／＼に引裂れた感傷！ボンヤリ街の灯を見^{めて}る
メスの様な冷たい眼に追はれ乍らぐつと突上げてくる反感がある
しん／＼と追つてゆく食と冷たさ、田舎娘の荒れ果てた頬を感じる
風にゆれてゐる細い電線を見極め様とあせつてゐる、夕ぐれの窓に――
地平の彼方までぐん／＼廣がつてゐる青空、私の旅情が飛翔する
冬枯れの田園のたそがれ、胸の中で見えない影を一人趁つてゐる

相 聞 池 上 富 司

むらぎもの心弱きをかなしみてわがむなもとのいのちに悶ゆ
うつむきにわが衣縫ふ汝がほほの髪のはつれのふるへさびしも
もろ乳のはりきる汝がむなもとぞまことをみなのいのちにふれる

兵士を送る

この一瞬何か嚴肅な空氣がみなぎり送らるゝ兵士の障が一樣にうるむ

發車のせつな擧る歡聲にこの瞬間群衆の雜念が消え

斑 雪 山 岸 彩 子

夕かげり寒しみつゆく道のべの雪斑らなり友は言^はなく
み冬田の斑雪の道をゆきゆきつ友が明せしことはかなしき
ふるさとの人の心のつめたくて友は再び家出んといふ
わが友の愁を知りてさむざむと冬野の涯にただすみにけり
はろばろと夕かげりつゝみ冬田の斑らの雪は白く光れり
青空にわきて流るゝ雲のごと人戀ふる身をかなしみにけり
ひたむきのつる想ひはさはあれどひとりしかへる冬の夜の道
消えやすき炭火おこして獨りゐに心しづけく君をおもひぬ
ふつふつとたぎる想ひに耐えにつゝかつての逢ひのはかなかりしも
世の人の口うるさくてたわやすくなすまじ戀を君のするてふ

き さ ら ぎ 霜 山 秀 子

きさらぎの陽はこゝろよし原ゆけば塹壕のかげは雪はだらにて
戸山ヶ原に夜襲あるらしうちつゞき機關銃の音ひゞき来るは

且歌に手をそめたらば飽かずしやる
こつた。折角いゝのが出来るように
なつたと見てるうち、消えゆくあの
影去りゆくあの影……ちや實につま
らんよ

「なるほど」

「佐藤とらよ、武田曉美など其後ど
うして居るかい。若い所では木野し
と子、堀川八重子だつたが……小
な昔戀しい名前だ」

「堀川さんは東京日目の多門師團凱
旋歌に應募してました」

「ほやまだ然ばあると見える。もう
一旗擧げちやどうだい」

○ 「こんどは田部君子さん……」

「大分若い方へいつたな」

「アラバスクのメムバーだつたんで
すが、なんせ若くて可愛くて歌が巧
いッてんで、白木さんが見出しちゃ
ッたんです」

「見出したのはい、が今ツから高架
に上つちや駄目だ、モチヅの捉え
方は確かにい、んだから眞面目にさ

へやれば相當なモンになるだろ。そ
れから、初めて見る名前だが、この
三十輯では霜山秀子の歌が割合こ
れとるぢやないか」

「これは東京の實談出身の人です、
在京中アラ、ギの茂吉さんに直接師
事してゐたさうで、詩南車へは山野
邊さんの紹介でした」

「そうだらう。野村幸子は岡野と
う夫人の膝下で育つたんだが、女流も
かう並ぶと英雄にならんわい」

「野村さんは一時自由律を初めたや
うでしたが……」

「いやあれはどつちにもいゝのがあ
る。自由律ではすつと前の

拾ひとつてゐる、朝！
などあり、最近になつて

しばらくは友のくるてふたよりな
り庭の雜草を若がむしりある

の、友情切々なものがあるよ」

「山岸彩子さんは如何でせう」
「そうちや、詩南車には可なり長く
居るんだらう。……急行列車の汽笛

参り来て君がおくつきの水清め草花あまた供へまつりぬ
冬枯れし土手下の道ほをぼそと多摩川岸に續きゐるかも
冬日うけ多摩川岸に砂利舟の動かすあるは静もりて見ゆ
家近く夜半にとゞろく機關銃の音は市街線の演習なるらし

インクの匂ひ

澤美枝

指に青く染つたインクの匂ひを嗅いてゐるとさびしくなつてきた
ごおんとなる鐘の音が街から街へ遠くばやけてゆく、ふじきの夜

二月の墓地

田部君子

たまり陽のうつら／＼とたゞよひる道を行きつゝ、眠さを覺ゆ
何故に満たぬ心を告げずしてうつら／＼と墓地に來りぬ
墓地づたひ風の流るゝ氣はひして冷たかりけり一人しゆけば
墓地づたひひえせまりくる静寂にたえんとしつゝ身はつかれたり
無氣味なる羽音をさせて大鴉せきひの上に翼たゝみぬ
かへり行く農夫らの姿浮べつゝ心足らひてかへり來にけり

山の小鳥

湯淺照明

朝な朝なわが庭に來て啼く鳥の枝移りするを懐しく見る
赤き實を啄みて居る山の小鳥けさ寒々と樹間に見ゆる

小春日

大竹秋平

黄昏るゝ赤井の嶺になほ明かく残る夕陽の色は寂しき
板塀のすき間を洩れる朝の陽は斜線となりて庭に射しをり
鶯高く圓を描きて舞ひてをる小春日和の晝ののどけさ
午ちかく陽射しまわりて木の肌を雪解けの雫傳ひ流るゝ

藪

鶯

窪田志明

春立ちの雨そぼふれる裏藪に鶯の聲はしばし聞きけり
ゆるくゆるく香のけむりは上りつゝ新らしき墓標の寂しくありぬ
たちのぼる香のけむりを見守りつかでかしばし去りがたきかも

かなしも、といふのがあつたと覺えておる。今までは未だ作歌態度が硬過ぎたが今度の作品はよく勉強した跡がみえる。なか／＼い、歌があるぢやないか。詩南社歌人中の白眉だらうナがまわんから相聞の歌でも大いに作つてみるこつたぬ

「然しあれは難かしいでせう」

「實感だよ、實感からもつてくれればいゝのさ。一體、戀を知つとる女は歌も巧い。澤美枝なども結婚前には驚くべき天分を見せたんだが、あいま、ちや今のうち何とかせんと萎んでしまふぞ」

「まだ新婚早々ですから生活に馴れてくれば獨りで立ち直るだらうと思ひますが……」

「それならいゝがな。こんどは自由律で非尻笥子といふのがあつたが、これは有望な歌人ぢやないか。大分フレインされておる」

「新妻久満夫先生の教へ子で、前には原妻子で出していました」

「そうかい。あれは可なりせん細な

感覺を持つつたが、この分ぢや出藍の譽れとなるわい。先づ細かい用語の研究をやらんだよ」

「定型とどちが、いゝです」

「それは判らんが、定型のまとまり過ぎとるのよしも、こんどの自由奔放の處に伸びる境地があるわけだ」

「それでは妙に早く固まつた人は自由律へ轉向する方が……」

「まあ、そうばかりも言はれんがね歌なんて結局ひとりの道だから、どうでもいいさ」

「近頃黒江さんから何かお便りでもございせんか」

「ないよ。あれも卒業で忙がしかるつたらん主義なんかサツパリと清算しつちまふたからわしも喜んでおる女人文藝や生活感情などに立てこもつた頃の勢ひで詩だけはやらせたいのよ。女流詩人として中央でも立派に立つてゆける人なんだから……」

「卒業後はすつと東京で……」

「まだ判らん。あれもデカダン派だどうなるか判らんよ」

終

早春の原ツば

小林しげる

早春の原ツばに
手足を思ひきりぐつと伸して
ころがろうではないか
空の蒼さが
ふんわりと ほんにふんわりと
もうふのやうにかぶさるよ

月光の洪水

友よ

燈をふきけして
今宵のこのすばらしい月光の洪水に
溺れよう
あゝだからだと
何か溯りたい様な気がする

塗られた感情

藤 美 子

其處に残されたもの
見よ！ 溝渠を越えて灰色い
廢墟のやうな鑄物工場の曲つた煙突が
赤錆びて、青いトタン屋根との美しい配合畫布を
塗りつぶして夕日が落つる

推積した石炭の山にかくれて
廢墟の影がこゝまで伸びてゐる
その影に多數の人の家の
悲惨な運命が隠されてゐるのを
私には寫し出すことが出来やうか

前の溝の中から
何か呼びかけるものがある
枯薄が黄金色に 夕日が傾むく

與へられた課題

澤 美 枝

お前よ
青春だけが知つてる氣持ちを
決して取り逃がしてはいけない
お前よ
お前はまだくゝ老いてはならない
空をご覽！
あの乳色のソファの中で
涙ぐんでる 月を 月さえもが……
お前よ
情熱を棄てゝはいけない
其れは人生への叛逆であるから
お前は今
平凡な明朗を追つてゐる
だが追つてはいけない
耐へがたき哀愁こそ
お前に與へられた

幸福な課題だ
お前の生活を飾る課題だ

冷たき情熱

山 岸 彩 子

ひたむきにつのる魔のごとき
このかんじよう
ふつふつと激る
このじようねつ
今更！
今更！
どうしたといふのだ
否定と肯定と
氷と焔の交錯を孕んで
わたしの理性は
無惨にも蝕まれつゝ
ぐんぐんと感情の間に
吸込れてゆく

まぼろし

西澤 恵子

三 日 月

窪田 志朗

美しい幻影！

彼は美しい幻影に憧憬れてゐる

そして陶醉してゐるのだ

どんな不幸

どんな悲哀

どんな嘆きの中にも――

この美しいイメエジの幻影を追ふてゐる

星が青く輝く夜――
燦々と三日月の月光が降る
片輪のひかり――

彼女への思慕が
こんなに燃えてゐるのに

野原の夜風は

私の心情を

傷ませようとすると……

あゝ！

そして美しい幻影と共に

軋られた恨を瞳に宿し

果敢なく惨めな姿を埋没しゆくである

山 雀 集

久々の師に見えんと田の畦の芹つむ子等に道訪ねけり

晝深し山寺訪へば金糸雀の裨殻とばす音かそかなり

山雀のこの山の湯に一羽ゐてつゝ音する晝のしづもり

暮れ残るみんなみの空仰ぎつゝ角兵衛獅子の重き足どり

地震ふりてゆらゆら揺るゝ吾が軀怖ろしくなりて飛び起きにけり

夜着のまゝ臥床飛起きて窓外のおどろゝゝに人騒ぐ見ゆ

昨日降りて積りし雪をけりにつゝ早朝の街を吾が行きにけり

春浅き雨戸を押せば冷やゝき粉雪ふくめる風の入りて

降れるとは見いざる程に八ツ手の葉あはゝ染めて春の雨降る

春の日のうらゝ續きて白きまで街路樹の葉に埃をつみぬ

幾日か晴日續きて麥畑の土細々と踏みよかりけり

ふと覺めて見れば枕を並べ臥す母目覺をるは淋しくあるか

病む吾に送りし友の花束の香りゆかしく床間に置く

姉上の落葉集めてたくしぐさ病の床に吾れは見て居り

ありし日のその面影を浮べつゝ友の訃音に涙ながせし

解き難き人生の謎を秘めながら亡にし御霊に我呼びかけん

君逝きし波浮の港の海の面に今日もかもめのたわむれて居る

山間の沼のみぎはの若草に小波よする春は來にけり

雨やみし濱邊の砂を踏み行けばぬれ光りて朝のひそけさ

野本 多霞夫

大 方 竹 羊

伊 東 眞 砂 常

新 妻 信 一

志 賀 裕 平

楠 晴 朗

磯 上 六 花

黄金ではない

湯 淺 照 明

女も男も貧しかった

夢を見た男

夢……………

みんな黄金づくめの夢だった

お伽噺の様な夢

貧しい男は何時も黄金で苦しんで居る

一握の黄金があつたなら……………

男には此上なく黄金は有難いものであり

男には此上なくうらめしいものでもあつた

黄金だ……………黄金だ……………

男はとう／＼夢に黄金を見た

男は黄金の林しを歩いてゐる

家も太陽も草も木も

そして飛んで居る鳥迄ビカ／＼光つて居た

男は喜んだ

こんなにも澤山な黄金

俺は幸福者だ

俺は世界一の大金持になれるぞ

そして男は黄金の花を女への土産に思つて手折つた

けれど女は決して喜ばなかつた

女の顔は悲しさに變つて居た

併し男は相變らず黄金の様に

はればれとして居る

なんだ……………と云う様な男の顔色

女はサメザメと泣いて居る

× ×

黄金ではない

黄金は男から優しい愛を奪つてしま

た

そして女からもそれを奪はふとして居る

雑 報

▲カルタ會の記

詩南社主催新年カルタ會は一月一日午後一時より平町藤田女學校内で開いたが好開村の一流名手などが乗りこんで来て吾々素人か呆然とさせたのも餘興の一つ。讀手は河瀬東朝子や穴戸師で會後初笑ひの福引に會を閉じたが非常な盛況で會衆は皆喜んで歸つた。(會考者)河瀬貴興志、馬場林鳥、尖戸正勝、池上富河、岩佐光明、相川四郎、福田武、山岸彩子、窪田志朗、澤美枝、鴨山清三、丹野六郎、馬目俊二、鈴木政一、橋秋夫、馬上榮、高野忠、新妻新一、福田隆精、根本十郎、中村末光、織内正、高田千里、田部君子、鈴木文子、吉岡文子、宮田徳子、二面うめ、村上富美子、吉田市、片寄歌二、白木英尾。

▲小集の記

新年小集は一月七日午後五時よりコンパルで開く。小名濱から佐川、高木、小濱の諸氏も來會されて交歡を盡し午後十時散會した。左は席上の寄せ書である。

○鶯や和弘のんどき／＼たさに

黄金ではない！女は男の變らぬ愛を望んで居たのだ

黄金ぢやない！黄金は悪魔だ！

女は狂人の様に呼んだ

けれど男には聞えなかつた

男は女が黄金を見て喜び唄つて居るのだと思つた

甘い接吻と抱擁の楽しい眩惑……………

男はかきむしられる様な喜びと惱ましさに亂舞して居る

女は男を殺した

女と男は今黄金の林の小路を……………

誘惑をしりぞけて

高らかに唄ひ乍ら歩いてゆく

男は女にそつと接吻した

魂と影……………唯影だけではあるけれど

秋の夜の魔火

志 賀 裕 平

空に黒いまくが落ちた頃

私は獨り野道に立つてゐた十一月の夜の遠い農家の灯はぼうと彼方に……………

センチメンタルな秋の夜は静寂と沈黙が續く

私の魂は闇のなかにすいこまれてすーと魔の谷底におとされる

私の魂は風鏡玉の如く

ほんやりと空間に浮べて

手まねいて居る

美しい火玉に道びかれて

その火は横に長く列んで

銀の棒の如く美しく光つて居た

光は早いテンポで私に

近かよつてビョービョーと云ふ音に

はーとわれに返り立ちどまつた時

目の前を銀の棒はかすめて

闇の中に姿をけした

○海の感情を携へて 何 郎 鳴

○窓にうすれる冬の霧、とに角 一 郎

○こんな僕です 牧 泉

○ほのかにもひさ／＼友の歌 歌 二

○來て旅の話は親しきものを 顯

○冬月夜の歡喜！ 歌 二

○女よ今宵の感情を忘れてくれ 直 吉

○感激！感激！ 和 弘

○ほうほうと泣き乍ら酒なくむ この無暗と嬉しい感情 市

○みんな出来てるぞ 英 尾

▲消 息

○小山田滋氏 一月、約一ヶ月に亘り九州炭坑方面視察

○石川梅子氏 去る一月六日より十五日迄愛兒病氣の爲め磯原在より平町某病院に通ふ

○吉田市氏 三月八日、上京同十五日歸る

○黒江實氏 東京女子藥學校卒業

○高木直吉氏 福島師範政科に學ぶ。三月二十六日小名濱錦盛館で送別會を開き吉田片寄、白木出席

○佐藤正美氏 三月四日同人退社

○警新短歌會 警城新聞社主催短歌會を二月十一日マルトモホールに開催出席者多数ありて盛會を極む

影をまさぐる

吉田甫

病得て幾日を経む

その日

その冬

思ひあふれて

哀れ幾重にも亂れし心

そのかそかなる顛音を聴きつゝ

いや果ての徑をゆくも

まこと言道も曙覽も湧かず

切れ切れの思ひは悲し

その陰鬱をあんぐり呑んで

病めばひよひよと人戀ふる

二月の頬に今宵又胸深く

ふつふつとあふれ来るもの

かきむしりかきむしり

君が空虚なる影をまさぐる

生活の顛落

今宵も亦みにくい争ひがあつたのか

流星が飛んだ

闘ひに破れたこの胸一ぱい復讐の憤怒を孕んで

ぶちのめされ

たゞきのめされ

罵倒のおびせを唇に噛み殺し

敗者のみが知る寂しき悲哀をのせて

流星が飛んだ

結婚

其處は一夜さを涙に濡れた

はかない痛手があつたか?

哀れひとゞきの白さを残し

しつとりと土深く吸はれて行つた春の淡雪

シイ坊は泣いた花嫁 (この一篇を花嫁の子へ)

あろろうまん

…失つた贈物…

片寄歌 二

桃色の封筒を買つた少女は海峽を夢見てゐる

青磁の壺に盛られた涙は骨董價値以外の何物

でもない。僕は遠い戀人を想ひ出した。

果物店の店頭で水蜜桃を見てゐる女は青梅の

貞操を固執してゐる。びいどろの中の人形が海

の彼方の郷愁を口吟む。青い電燈の部屋で僕は

なくした指輪をさがしてゐた。

いか。

水に花が咲かないか此はさみしい後姿だ

肩に春が載つてゐる 掌に火を咬へてゐる部屋

にひとりゐる 僕はかなしい かなしい僕。

詩人とはいる風呂

—吉田甫見—

裸體の詩人は湯氣にさらはれそうだ

詩で噓ぐ口の中はあけみの冷めたき壁の感情で

ある。

僕の詩屑

水が硝子となる 煙は雲となる 詩人は他人

となる 戀人よ やがては人妻となるのではな

聲明書

近時、我が郷土における短歌藝術の著るしき擡頭と進展とは、勿論愛好の各人が熾烈なる短歌意識に因ると雖も、わが詩南社同人が多年郷土歌壇に致したる建設的努力も亦少しとせず、而して今日の歌壇興隆を見る、寔に欣快の至りに堪えない。

顧ふに、我が郷土における文藝運動は夙くより幾多の先輩を生んで、その間やしもすれば混然一致の歩調を欠き大同小異の立場と主張より互に惡聲を放ち、然らずして世上流行の偏狹淺薄なる思想に迎合せる徒輩は我々の身邊に不遜なる暴言を投じ敢へて識者の誤解を導かんとする、もとより單なる詩歌文章の趣味に遊ぶ我々同人はこれらの小人輩が持つ偏見を遺憾とし、且つまた社内客員並に後援各位の迷惑を慮り從來屢々本誌編輯後記及び新聞紙上によつてこれが是正の辯をなしたつゝ來つたものである。而して一般によく之を諒とされて茲に創刊以來九歳を迎へ得たことは我々望外の喜びである。

詩歌は鬭争に非ず、偶々對立せんがための鬭争の口舌を以て自己弱小を暴露する者あるを見聞する。夏虫の勇憐れむべしと言ふ乎。世人おほむね之を笑殺するも未だ

我々が鬭争を好んで之らと對立して存在するかの如く思惟吹聴する者ありと聞く。輕卒なる第三者の言動は後來或は禍を招くこと少なからず。詩南社の組織内容並に對社會的使命を知らざるの卑言は徒に認識の欠如を語るのみならず或は何らかの爲めにせん意圖を疑はるものである。宜しく自戒して世間的黃嘴の徒とならざる要をなせ。詩南社同人と雖も一般の誤解が或は累を客員に及ぼさんことを慮り自ら玉碎して以て新らしき有力なる文藝團體出現の捨石たらんと望むこと再三なるも機熟せず在昔今日に至る。

然るに今や我々の周圍には今後益々熾んなる短歌運動の展開を見るであらう。而して漸次短歌人の大同團結の氣運が醸生されつゝあるを知る。詩南社歌壇も亦この氣運に後るゝことなかるべしとなす。茲において我が詩南社が郷土において果し得べき歴史的役割は一先づ終りたることを痛感し同人合議の結果、社内客員の協賛を得て我々は第三十輯を以て詩南車終刊號となし、同時に詩南社の解體を聲明する。

昭和八年三月

詩南社

詩南社年譜 (自大正十五年 至昭和七年)

- 大正十五年
六月一日 詩南車前身『駄洒落』創刊
- 昭和二年
八月五日 『駄洒落』第拾輯を詩南車と改題
- 昭和三年
六月二十日 詩南車第拾七輯活版に改め四六倍版で發行
八月八日 文藝講演と音樂の夕(日本キリスト教會)
八月十五日 第拾八輯發行 宮田青波、秋山慈子の二氏同人となる
八月二十日 警城文藝協會成立
十一月廿四日 志友懇親會(日本キリスト教會)
- 昭和四年
四月十五日 第二拾輯發行。同全國詩歌俳人短歌展覽會(香田女學校)
十月十三日 第一回短歌會(木見莊)
- 昭和五年
二月五日 第二拾二輯發行(新春躍進號)
六月廿日 第二拾三輯發行
七月廿六日 第二回短歌會(木見莊)
八月廿四日 樂業館)
十二月七日 第三回短歌會(マルトモホール)

- 昭和六年
一月廿五日 第二拾四輯發行。黑江雲、佐藤正美氏同人となる
六月廿五日 寄歌二氏編輯同人か退き佐藤正美氏發行人となる
- 昭和七年
三月五日 第四回短歌會(マルトモホール)
三月廿日 好同支部設置第一回短歌會を好同小學校内に開催
四月九日 舞踊と音樂の會(平馬女學校)
五月十日 更生第二拾六輯發行新たり、美崎一尾氏同人となり、寄歌二氏復歸す
五月十五日 ヒケニツク(新舞子)
六月十五日 ヒケニツク(豊間)
七月二十日 更生第二拾七輯發行
八月廿五日 小集(マルトモ食堂)
九月二日 獨唱舞踊(マルトモホール)
九月廿七日 同人宮田青波氏夫妻大島波澄港に於て卒去
故宮田氏夫妻の葬儀神谷村一山寺に於て舉行。詩南社より花環一個及び香料を供へ同人一同會葬す
十一月五日 第二拾八輯發行
十一月十四日 秋のヒケニツク(川前)
十一月二十四日 新妻久瀧氏編發禁
十二月十日 支局に第五回短歌會を編島民報平本ホールに詩南社合同主催でマルトモホールに開く
十二月卅日 第二拾九輯發行。白木英尾氏編輯同人を退く

解体に當つて

片寄歌 二

「詩南車」今三拾輯を以つて、前記聲明書の如く終刊號とし、同時に詩南社組織を解體することに決定した。

この問題は同人熟慮合議の上、社内客員の協賛を得て決定したものであつて、單なる個人的及び精神的、經濟的の精算の解體ではない。發展に對する一段階の結果である。進歩、向上に對する一道程にはかならない。

詩南社解體の理由及びその間の事情、目的に就いては前記聲明書に依りて賢明なる諸氏は良く察知する事が出来た事だらうと思ふから、今此處で改めて再述の必要を認めぬ故、省略して要は客觀的情勢が吾々の解體を必要としたのだ。とそう云ひたひ。

形式的だが詩南社解體に際し、その感想、希望なりを少しばかり云はして貰ふ。

こんな貧弱な雑誌「詩南車」ではあつたが、三

拾輯、約九年間の長きに亘つてやつて来たかと思ふと、流石に愛着もあり、未練もあり、惜しくもある。同人の脱退、幾度かの經濟的危機及び他文藝團體による壓迫、幾回となくピンチ區域の囿内にありて怖かされ乍ら、それに屈せずに対抗して今日迄で来た詩南車である。今此處に、解體！そう云ふ致命的な言葉を聞くと、観念しても、観念しきれないものがある。吉田甫の云ふ如く「解體！それは決して退歩や崩壊ではない。磐城文藝史上に記録される、それ以前とそれ以後との間に印される一本の太い線である。新しいものの生れ出づるための爆發でならねばならない」と、これが眞實ならば、そんな小兒病的な小感情をすつぱり抛げ棄て、詩南車をやめ、結社を解體しよう。それが正しいからである。

詩南社が過去を清算、抛棄し、偏狭淺薄なる思想に迎合せる大同小異の狸や狐を踏みにじつて、

一つの方向に成長し、明日への飛躍の土臺を築かうとしてゐる。今古巢を捨てやうとして、一パーセント程の未練は置土産として許されるであらう。詩南車最初の組織は二三の文藝愛好者が漫然と集まつて、一つのサークルを作り、各自各傾向の作品を不拘束の儘に發表してに過ぎない。假りに作品形式に就いて見ても小曲あり、民謡詩ありガツ／＼したイデオロギイの詩もあると難然さで共通した点と云へば皆の廣い意味での自由主義的な気分であつた。

これが爲め、一時は禍いしてプロ詩に解消しようかと云ふ意見もあつた。然も詩南車も號を追ふに従つて、そんな日和見主義的気分は清算され、藝術至上主義に主きを置く様になつた。それが今の日詩南社の基礎を得たと云へば云へる。

詩南社の仕事としては、數多く、そして落度なく、効果的にやつて来たと思ふ。講演會、展覽會、音樂會及びピクニック、小集等あらゆる、機會を掴んで詩南社の擴大強化、郷土藝術の發展及び郷土人との接觸を計つた。今此處に反り見れば其等の仕事は無意味な役割では無かつたと確知する事が出来ると思ふ。

詩南車の實際的に活躍し一般的に廣く認識されたのは第二拾六輯以後と云つてよからう。美崎一郎、白木英尾、山野邊青甫、吉田甫等の諸氏との確き團結、小山田滋氏の磐城出現に依りて、詩南車の跳躍時代を見、歴史的使命の一頁を演じたものと斷言して、はばからない。

その間、同人諸氏の献身的努力と熾烈なる短歌意識は今日の詩南社の基礎をより以上に堅實なものにしたものとして、決して忘れてはならない事だ。

兎角、詩南社解體しても、吾々の藝術は解體せず。明日への飛躍の爲め灼々と藝術慾は燃えてゐる。吾々の藝術はあくまで未知への憧憬であり、新への創造である。新しい(明日への)地平線の展開のない藝術は、藝術としての價値なき様に、吾々は解體しても、又明日への新しい美を創造して行くことを忘れてはゐない。

終りに私として、長い間、直接的、又は間接的に色々と御後援、御鞭撻下された高久晚霞氏及び多くの諸氏に對し、心ろから厚くお禮を申し上げたひ。と同時に諸氏の健康を祈つて擱筆する。

★ 車 ★
★ 窓 ★

美 崎 一 郎

夢は元來無色だといふ。或は灰色だといふ自分は何時も、一樣に青色に蔽はれた夢を見る。覺めて後に種々な色彩感の残つてゐる夢は殆んど見たことがない。曾て月の破烈した突飛な夢を見たことがあるけれども、その殆ど煙も同じく青色だつた。男性は大抵かうしたものをらしい。所が女性には麗々美しい色彩の夢を見る人がある。或人は衣服の美麗な模様を見たと言つてゐた。然し夢の本質は無色なのだらう。女性の色彩の夢も大方は暗色のグエールを通して見てゐるやうである。小野小町は有名な夢の歌を残してゐるがさて、夜毎に色美しい夢を樂しんだのだらうか。

○ 山 野 邊 青 甫

詩南車最後を飾る白撰歌集が「ばまゆふ」と決定した。女性的な柔かさのあるため、力弱い感じはないでもないが、

一人口誦んで見れば矢張り、名である三熊野の浦の濱木綿百重なす心は思へどたゞに逢はぬか。

これは、萬葉集卷四にある人麿の歌である。こゝに云ふ。ばまゆふとは是である。同じく萬葉に、木綿花の語がある。木綿とは楮の皮の繊維で織つた純白の布である。濱木綿もその花が丁度木綿の如く白かつたので、この名が出たものであらう。葦は芭蕉の如く幾重にも重なり葉はおもとに似てそこから七月頃になると白い花が開き高さは二尺程になる。

○ 白 木 英 尾

中學四年の時だつたと思ふが、高師を出たばかりの先生が當時のインタナーナショナルといふ言葉を知らなかつた爲め、その構成に就て質問すら反つて赤面したことがあつた。ところが今でも斯んな場合ばかりである。所謂郷土の先輩とか名士とかいふ人達と會談してゐると思想的の教養や時局に対する認識が充分でない

故か、折角の談論風發もセントが外れてくるので片腹痛くなることがある。こんな人達で發言される石城境界の動向は果して何うなる？

○ 吉 田 甫

詩南社の解體、それは決して退歩や崩壊ではない、私は進歩だと言ひたい。磐城文藝史上に記録される。それ以前とそれ以後との間に記される一本の太い線である。新しいものの生れ出づるための爆發であらねばならない。縮死したのだから言ひたがるウルトラリケンなども如何にデマろうとも、四月の空は蒼いのだ。

○ 片 寄 歌 二

春のいぶきが降る。山に登ると視野はひろびろ、緑の視野が、僕の新しい書物に、午後の雜草の匂を一溢にしみ込んで呉れたので、山をどん／＼降ると、ふと……足先で小石を蹴飛ばした。危険い？もう少しで深い所に落ちる所だつた。落ちなかつたので、ホッとした。何時迄も胸がどき／＼してゐた

・ 編 輯 後 記 ・

△詩南車發行は約一ヶ月遅れて甚だ申し譯ない。編輯部にも色々の都合あつた爲でもあるが、原稿の集りのおそかつたことともその一因である。早く送られておる方に迷惑のかゝるのもよく知つて頂き度い。
△久し振りで高久晩霞先生の作品を得。又小名濱から高木佐川兩氏が作品を寄せて頂けたのは愉快である。其の他詩南車へ初めての方も見られ本誌は大部充實したものとつた。
△過日本兎莊に於いて高久、小山田、新妻先生等にお集りを願ひ歌談會を催し、この有意義なお話しを本誌上に轉載して皆さんに發表しやうと思つてゐたところ都合により之を割愛することにした。御出席下さつた方にお詫びする次第です。尙當日は高久先生に色々御世話になり御厚意を謝します。
△詩南車も本誌を終刊號として解體することになつた。創刊號以來九ヶ年、磐城文藝界にその足跡を印して來た詩南車が歴史的役割を果たして、こゝに潔く終刊號を送り得ることは嬉しい。然しこの間、片寄氏の努力は忘れてはならない。そしてこゝに片寄氏と共に働いて呉れた宮田

氏のぬないことは淋しい。
△不馴れた編輯でどんな雑誌になるか心配である。が、絶えず白木氏の御骨折りを仰いだ。こゝに厚く感謝の意を表する。(青 甫)

△詩南車三拾輯記念として白撰歌集「ばまゆふ」を出す事にした。我々の今日までの歩いて來た道の總決算であり明日への飛躍の土臺である。出来るだけ相應なものを作りたい考へである。御期待願ひたひ。

△詩南社も本誌で解體、明日から「詩南車」はなくなる。九ヶ年間もやつて來たと思ふと愛着もあり、悲しくもある……が、客觀的情勢がそうさせたのであると思つて觀念する外はあるまい。私は進歩に對する一段階であると思つてゐる。尙詩南社の剩餘金七圓四拾六錢ばかりある。これは歌集「ばまゆふ」の経費とする事にした。御承知願ひたい。(歌二)

△よくやつてきた……、今更年ら歌二氏の勞苦が思ひやられる。眞に深くましい献身的の仕事であつた。他の何人がなし得た所だらうか。我々は郷土文藝界を云々する時、先づ今日のアウトラインを築いた彼の偉い人格の力を思はねばなら

ない。
△こんどの解體が決まつて、さすがに我々は感傷無量である。然し、これは確かに發展への一段階に過ぎないのである。或る仕事に一つの段階をつけることは、何でもない様で決して易々たることでは來ない。

△從來、郷土の斯ういふ方面に於ては謂はゞ我々がその主潮となつてきた。然し今後の我々の去就に關しては未だ何も言へない。何か言へるとしても恐らく「ばまゆふ」出版後になるだらう。
△私だけが過去一ヶ年、いろ／＼と御交誼にあつかりました。茲に御厚禮申し上げます。いつも餘白の埋め草ばかり書いてきたけれ共、こんどこそこれでお別れ。サヨナラ

昭和八年四月一日印刷
昭和八年四月五日發行
編輯兼 福島縣平町五丁目二八
發行所 片 寄 歌 二
印刷所 福島縣平町長崎町卅五
福島縣平町五丁目二八
發行所 詩 南 社

◇詩南社代表歌人自選集

はまゆふ

不朽の業績と

郷土歌壇の金字塔！

・ 内 容 ・

萩原 たいけ	新妻久満夫	戸部 曙歌	小山田 滋
大平 松夫	渡邊 何鳴	片寄 歌二	吉田 甫
高久 晚霞	高木 直吉	武田 あけみ	田部 君子
根本 橋月	永山 徳一	長瀬 貞夫	山野邊 青甫
山下 多賀子	山岸 彩子	松村 清	池上 富司
石川 梅子	井尻 窈子	野村 幸子	熊谷 金見子
黒江 寛	赤井 嶽男	澤 美枝	佐藤 義家
佐藤 とらよ	佐藤 正美	白木 英尾	佐川 和弘
美崎 一郎	霜山 秀子		

- 五月中旬出版
- 本多朝忠氏装幀
- 四六版八十頁
- 領價金壹圓

發行所 福島縣平野町五丁目二八 詩南社

乳幼児内科

・ 健康相談 ・

平町・ねすみ坂

小兒科
内科

渡邊醫院

電話一六一番

◇ 滞留隨意

新刊書籍
文房具
中等教科書販賣

マルトモ書店 電話234番
マルトモ運動具店 電話597番
マルトモ食堂 電話123番

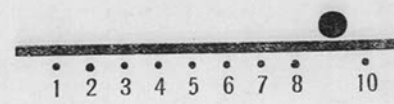
各色短紙
各種冊紙

平町一丁目



坂本紙店

電話 一八番
振替東京六六一七番



1 2 3 4 5 6 7 8 10

K • K A M A Y A

目科療診

内科、小兒科、婦人科
外科、耳鼻咽喉科
皮膚病、花柳病科
レントゲン科

院長 醫學士 高久 忠
副院長 新潟醫學士 赤羽 清
藥局長 藥劑師 佐竹 菊雄
宅診 午前・往診 午後

平町田町六十四番地

高久病院

電話 五一三番

頒價金拾五錢(送料貳錢)

三猿文庫